

# 家康伝承一覧

## 家康伝承一覧の表の見方

- ・本一覧表は浜松市博物館で市民協働で行った家康伝承調査事業において調査した伝承です。
- ・令和2年9月時点の行政区ごとに分けて記載しました。
- ・表には、伝承の番号、伝承名、伝承の内容、参考文献を記しています。
- ・『家康伝承調査事業成果報告書 家康伝承の浜松』において、伝承に付けた番号と一致します。
- ・同じ伝承名がついていても、内容は一様ではありません。類似のものはひとまとめにしましたが、内容が大きく異なる場合は別欄に記載しました。
- ・伝承には出典となる参考文献を記していますが、極力元の文章の趣旨が伝わるようにまとめましたが、読みやすさを考慮して、補足・修正をしている部分があります。
- ・三方ヶ原の戦いについては、三方原の戦い、三方ヶ原合戦のように様々な表記がみられましたが、三方ヶ原の戦いに統一してあります。

区名	伝承名	町名	伝承の内容	参考文献1	参考文献2
中1	下垂れ町	尾張町	家康は三方ヶ原の戦いで負け、浜松城の東門(今の尾張町辺り)に向かって逃げていた。その時、家来が兜の緒が垂れていると家康に伝えたが、家康は紐を垂らしたまま逃げた。それから、紐垂れ(ひもたれ)という地名がついた。いつの頃からか、下垂れ(しもたれ)と呼ばれるようになり、更に後に尾張町に改名された。	御手洗清『家康の愉快な伝説101話』(遠州伝説研究協会、1983年)	
中2	小粥の名字	曳馬	三方ヶ原の戦いで敗れた家康は、逃げ隠れているうちに腹が空いてしまい我慢できなくなった。農家に逃げ込んだ家康に、夫婦が食べ残しの僅かな粥を差し出した。家康はお代わりをし、鍋底の僅かな粥まで食べてしまった。家康は礼として、その家に小粥の名字を与えた。小粥家の紋は「丸に二引き」で、茶碗の上に二本の箸を置いた形を表している。	御手洗清『家康の愉快な伝説101話』(遠州伝説研究協会、1983年)	渥美実『浜松の伝説』上 シリーズ・わたしの散歩道4(ひくまの出版1981年)
中3	塩の専売	塩町	ある日、家康が戦に敗れ逃げていると、城下の塩市口の辺りで敵兵が迫ってきた。すると前に蓑を着て笠をかぶった男が歩いている。家康は男の蓑と笠を借り、敵の目をくらませ無事に城に帰った。戦いが終わりその男を呼出し、礼に望みの物を尋ねたところ、男は塩市口の塩の専売の許しを望んだ。家康は塩市口の塩の専売を認めた。	御手洗清『家康の愉快な伝説101話』(遠州伝説研究協会、1983年)	渥美実『浜松の伝説』上 シリーズ・わたしの散歩道4(ひくまの出版1981年)
中4	隠れの里	花川町	家康は三方ヶ原の西に逃げて来て、森を見つけその中で隠れた。そこに居合わせた庄屋の八右衛門は、百姓の着物を渡し家康を百姓姿に変えた。家康は敵に知られずに無事帰城した。家康は褒美として八右衛門に金子と刀を与えた。その金で八右衛門は浜松へ続く道の普請をした。この道を「八右衛門街道」、家康が隠れた所を「隠れの里」と呼んだ。	御手洗清『家康の愉快な伝説101話』(遠州伝説研究協会、1983年)	
			三方ヶ原の戦いの時この土地の庄屋八右衛門は、須ノ木沢、長栄寺あたりで草刈りをしてきた。そこに家康が逃げしてきたので、刈った草を掛けてかかった。庄屋は家康を刈った草の中に入れて隠し、家に連れて行き蕎麦を食べさせた。家康は無事に城へ帰ることができ、八右衛門は家康から褒美に刀をもらった。八右衛門が、浜松城まで年貢を納めに行くときに通った道は「八右衛門通り」と呼ばれ、拝領の刀を差す姿が堂々としていたため、道を歩くとき「八右衛門風が吹く」と言われた。	浜松市立北部公民館活動推進委員会『しいの森・はぎの原 わが町の文化史』(浜松市立北部公民館、1987年)	
中5	作左曲輪	松城町	三方ヶ原の戦いの時、家康は本多作左衛門重次を呼び、浜松城が武田軍に囲まれ長期戦となった時の兵糧について心配になり尋ねた。すると作左衛門は、籠城に備え米は十分貯蔵し用意であると答えた。家康は非常に喜んで、米の貯蔵蔵の場所に作左衛門の屋敷を作することを許した。それが後の作左曲輪となったのだという。	浜松史跡調査顕彰会専門委員会『浜松の史跡』(浜松史跡調査顕彰会、1976年)	
中6	犀ヶ崖	鹿谷町・布橋一丁目	三方ヶ原の戦いに負け浜松城に逃げ帰った夜、家康は城のすぐ北にある犀ヶ崖に布を渡し、あたかも橋が掛かっているように見せた。武田勢は先を争ってその橋を渡り、城に攻め込もうとした。不慣れで暗い夜道の事、多くの兵が落下して、死んだ者数知れずであったという。現在犀ヶ崖は静岡県の史跡に指定され、犀ヶ崖資料館がある。	渥美実『浜松の伝説』上 シリーズ・わたしの散歩道4(ひくまの出版1981年)	加藤鎮毅『あの町この町 遠州地名町名物語』浜松・浜北編 シリーズわたしの散歩道3(ひくまの出版、1981年)
			犀が崖の藪蚊は武田軍の亡霊といわれ、よく人を刺し、刺されるとたいへん痛いといわれている。	静岡新聞『はまつ百話』第16巻(静岡新聞社、1975年)	
中7	鎧かけの松	元城町	ある負け戦のおり、城内に入った家康は松の木の下で休んだ。その日は暑い日だったので鎧を脱ぎ松の枝に掛けて涼んだ。松の梢から涼風が吹き汗が引いた。家康はそれからゆっくり屋敷に戻っていった。この松は、鎧かけの松と呼ばれ、元城町にあったが、今はその三代目となる松が浜松市役所南西にある。その折、馬も疲弊していたため、近くの清水で馬を冷やした。そこは「馬冷やし」という地名で、今も残っている。(浜松市役所西側緑地)	御手洗清『家康の愉快な伝説101話』(遠州伝説研究協会、1983年)	渥美実『浜松の伝説』上 シリーズ・わたしの散歩道4(ひくまの出版1981年)
			家康は、三方ヶ原の戦いで負け、城に向かって逃げていた。ところが途中で腹が減ってしまった。すると道端に茶店があった。家康がその茶屋で小豆餅を食べていると、敵兵が追ってきたので、銭を払わずにあわてて逃げ去った。茶店のおばあさんが驚いて、家康を追いかけて銭を受け取った。後に小豆餅を食べた所を「小豆餅」、銭を払った所を「銭取」という地名になったと伝えられている。	御手洗清『家康の愉快な伝説101話』(遠州伝説研究協会、1983年)	渥美実『浜松の伝説』上 シリーズ・わたしの散歩道4(ひくまの出版1981年)

中 8	小豆餅と銭取	小豆餅	三方ヶ原の戦いの後家康が江戸に移ったころ、浜松城主堀尾吉晴の弟高階晴久が、用事があって三方原を通りかかると、松林の中に小さな茶屋があって、小豆餅を売っていた。すると茶屋の奥から気味の悪い声が聞こえてきた。晴久は恐ろしくなって城下まで逃げ、一軒の家に飛び込んだ。すると家の者があの辺りは家もない荒地地だと言う。翌日、晴久が、家来を連れてそのあたりに行ってみると、三方ヶ原の戦いの戦死者の骨が散らばっていた。一行はこれを集め、懇ろに祀り、小豆餅を供えた。それ以来この辺りを「小豆餅」という。 また銭取は、明治の頃までこの辺りには追いはぎが出て、道行く人を悩ませた。追いはぎに銭を取られたので「銭取」といった。	御手洗清『遠州伝説集』(遠州出版社、1968年)	
中 9	家康と清水町	三組町	家康は負け戦で命かながらうやく浜松城に戻って来た。家康は喉が乾き疲労困憊だった。家来に急いで水を探させると、この辺りに清水の湧く池があった。その清水を飲み元氣を取り戻した。それ以来この辺りは清水町という名が付いた。清水町(しみず)、半頭町(はんこう)、秋葉町(あきは)が合併して今の三組町になった。	御手洗清『家康の愉快な伝説101話』(遠州伝説研究協会、1983年)	渥美実『浜松の伝説』上 シリーズ・わたしの散歩道4(ひくまの出版1981年)
中 10	白尾の名字	八幡町	家康は三方ヶ原の戦いで敗け、白馬に乗って唯一人で逃げていた。八幡宮の境内に差し掛かったところで敵兵の気配を感じ、境内の楠木の根元にある大きな洞穴に隠れた。しかし馬に乗ったまま隠れたので、乗っていた白馬の尻尾が洞穴の外に出ている。村人が急いで馬の尻尾を穴の中に押し込み隠してくれたので、家康は一命を取り留めることができた。その村人は礼として白尾という名字を名乗ることを許された。	御手洗清『家康の愉快な伝説101話』(遠州伝説研究協会、1983年)	渥美実『浜松の伝説』上 シリーズ・わたしの散歩道4(ひくまの出版1981年)
中 11	権現谷の片身の魚	富塚町・和合町	富塚の権現谷に陣を敷いた家康は、無性に魚が食べなくなった。すると家来達が近くの池でスズキを捕まえて来た。スズキを一度に食べてしまうのは勿体ないと片身を切らせ食べていると、敵の大軍が迫って来た。この魚も命が惜しかろうと、片身の魚を池へ放すとうれしそうに沈んでいった。やがてこの魚は佐鳴湖の主となり、池を「片身の池」と呼ぶようになった。	御手洗清『家康の愉快な伝説101話』(遠州伝説研究協会、1983年)	渥美実『浜松の伝説』上 シリーズ・わたしの散歩道4(ひくまの出版1981年)
中 12	鎧田(ヨロイダ)	富塚町	家康は戦に敗れ家来とはぐれてしまい、一人富塚のあたりに逃げこんだ。汗で濡れ重くなった鎧を、田んぼの脇の木に掛け一息入っていた。家来達は家康の鎧を目にして近くにいた家康を見つけ、急いで皆で浜松城へ帰った。それ以来ここを「鎧田」という言うとのこと。富塚小学校裏に鎧田(よろいだ)と言う所がある。	御手洗清『家康の愉快な伝説101話』(遠州伝説研究協会、1983年)	
			富塚小学校の北側に、「鎧田(よろいだ)」と呼ばれる家がある。家康は敗走中、田んぼの中の百姓にかくまってもらい助かった。百姓は後に声の届く限りの土地を与えられたと伝えられている。昔この鎧田の辺りには、高山さんの家が一軒建っているだけで、高山さんは屋号の「鎧田さん」と呼ばれていた。	読売新聞浜松支局編『新家康探訪』(東海電子印刷、1979年)	
中 13	旗かけの松	和合町	家康は三方ヶ原の戦いで、安藤三郎兵衛の家の裏に陣を敷いて指揮をした。そこでこの谷のことを「権現谷」と言う。この時、家康は山の中腹の松の木に旗をかけた。それ以来この松を「旗かけの松」と言う。この松が明治時代に枯れてしまったので、村人は記念に臼を作ったという。この臼は今もこの辺りの旧家に残っているとのことである。	御手洗清『家康の愉快な伝説101話』(遠州伝説研究協会、1983年)	
中 14	武田勝頼の首実検	中山町	武田家が滅んだ後、家康が武田勝頼の首実検をしたのが半頭町(中山町)だという。自刃して果てた勝頼の首を、信長は棒切れで散々に叩き付け、家康に送りつけた。家康は敵将だった勝頼の首を粗末に扱わないように家来に命じ、三方の上に丁寧に乗せて大切に扱った。そして勝頼の首を甲斐の国に返した。	御手洗清『家康の愉快な伝説101話』(遠州伝説研究協会、1983年)	
中 15	小池家	上浅田一丁目	戦に負けた家康が小池家に助けを求め、数日の間隠れ住んだと伝わる。家康はその恩を忘れず、小池家より北の城下までの土地を与えたという。	浜松市立南部公民館わが町文化誌編集委員会『汽笛・ステーション・まちこうばわが町の文化誌』(浜松市立南部公民館、1991年)	
中 16	用源寺の身代わり薬師	海老塚一丁目	海老塚の用源寺に、村人が信仰する薬師如来があった。家康の家来で医者松山将監という者が、三方ヶ原の戦いで矢を背に受け命が危なくなった時、急に痛みが消えた。松山将監は急いで帰り、前から信仰している用源寺の薬師如来を拜んだ。薬師様の背中には、将監の身代わりとなってくれた矢の跡があった。将監は薬師如来への信心を一層厚くした。	浜松市立南部公民館わが町文化誌編集委員会『汽笛・ステーション・まちこうばわが町の文化誌』(浜松市立南部公民館、1991年)	

中 17	成瀬谷	蜷塚一丁目	三方ヶ原の戦いで戦死した徳川の武将、成瀬隼人正義は、当時西尾城主でもあった。使番頭旗奉行として勇猛に戦ったが、刀折れ矢尽き宗源院に程近い谷で最後を飾ったといわれている。この谷は現在でも成瀬谷といい、地名にその名を留めている。成瀬正義の墓は宗源院にある。	城北地区愛称標識設置委員会『文化はぐくむまち・愛称標識』(城北地区愛称標識 設置委員会、1997年)	
中 18	酒井の太鼓	元城町	三方ヶ原の戦いで浜松城に逃げ帰った家康は、戻る家来の為、城の門を開けたままにし、かがり火をたいた。すると城を守っていた酒井忠次が、物見櫓で大太鼓を打ち鳴らし始めた。城の近くまで追撃してきた武田勢は、勇気に満ちた太鼓の音に、さては奇策がめぐらされているのではないかと思ひ、城内に攻め込むのを止めたという。	御手洗清『家康の愉快な伝説101話』(遠州伝説研究協会、1983年)	神谷昌志『はまつ歴史発見』(静岡新聞社、1987年)
			酒井の太鼓の話は黙阿弥作「太鼓音智勇三略」(たいこのおとちゆうのさんりやく)という芝居にもなった。	静岡新聞『ふるさと百話』第17巻(静岡新聞社、1975年)	
中 19	身洗い場跡	西伊場町	三方ヶ原の戦いで傷ついた徳川方の将兵が、この溜池で体を清め洗い休んだ所だと昔からの言い伝えがあり、この地を身洗い場といっている。溜池は2つあって北側には山田川が流れ、周囲には天王山などの山に囲まれ、いつも水をたたえていたという。今は当時をしのばせるものはない。	西地区愛称標識設置委員会『文化の道しるべ』(西地区愛称標識設置委員会、1998年)	
中 20	夏目次郎左衛門吉信	布橋二丁目	三方ヶ原の敗戦の後、家康は小姓達を城へ帰し、自らは敵中へ突撃しようとした。すると夏目次郎左衛門吉信が、「命を落とし何をするこぞ」と、家康を城へ逃がし身代わりとなり、敵十数人を倒した後、ついに討ち死した。これは、三河一向一揆の際、一揆方であった吉信を処刑しなかった家康の恩情に報いたものであった。	御手洗清『家康の愉快な伝説101話』(遠州伝説研究協会、1983年)	みらいねっと浜松『未来につなぐ地域と人・歴史』浜松市中区の魅力(みらいねっと浜松、2021年)
中 21	火ともし山	中沢町	三方ヶ原の戦いで敗れた家康は浜松城に逃げてきた。敵の夜討を防ぐため家来の大久保忠世は、城の北東の山で火を焚き、鉄砲を撃って城に大勢兵がいると見せた。しかし徳川方の鉄砲はわずか十八丁だった。それを見た伊場の岡部某という郷士が村人を連れ火を焚くのを手伝った。武田勢は、それを見て大勢の兵がいると思ひ夜討ちをしなかった。その場所を「灯ともし」といい、今も地名が残っている。	御手洗清『続遠州伝説集』(遠州出版社、1974年)	
			三方ヶ原の戦いの時、武田方は夜討ちをかけようと、浜松城へ向かっていた。見ると、浜松城の辺りが燃えているので、家康が城に火をつけ逃げ出したと思ひ、どっと攻め込むと暗闇にひそんでいた鉄砲組に打ち込まれ大きな損害を受けた。徳川方の大久保忠世が家来を連れて夜通しかがり火をたいていた場所を「灯ともし」といい、天林寺の北東に地名が残っている。	渥美実『浜松の伝説』上 シリーズ・わたしの散歩道4(ひくまの出版1981年)	
中 22	雲立の楠	八幡町	家康は、三方ヶ原の戦いで逃げる中、八幡宮で救済を祈願した。すると大楠から瑞雲が立ち上った。これに靈験を感じた家康は、この楠木を「雲立の楠」と呼んだ。八幡神社由来記によると、八幡太郎義家が陸奥へ向かう途中、境内の楠に御旗をかけて戦勝を祈願したと伝えられる。家康はこの義家にあやかりようと、開運の楠木の根元にある洞穴に隠れて、打倒武田の秘策を練った。すると御旗の楠の上に瑞雲が立ち昇り、白馬にまたがった神霊が現れ、浜松城めがけて飛び去った。家康は直ちに城へ帰り、犀ヶ崖の奇計を思い付き実行した。犀ヶ崖の戦いの時、白馬の神霊がまた現れ、武田軍勢を犀ヶ崖に誘い込み、敵兵は次々に崖から落ちて戦死した。	読売新聞浜松支局編『新家康探訪』(東海電子印刷、1979年)	
			家康が三方ヶ原の戦いで逃げ帰る途中、八幡宮に救済を祈願した。すると、大楠から瑞雲が立ち上ったという。これに靈験を感じた家康は「雲立の楠木」と呼んだ。	御手洗清『家康の愉快な伝説101話』(遠州伝説研究協会、1983年)	
中 23	歌謡坂	蜷塚二丁目	蜷塚中学校の北側に、歌謡坂と呼ばれる坂がある。小藪で築山御前の首をはねた武士が、浜松城への帰りにこの坂を通り、あまりに寂しかったので、歌を謡って帰ってきたという言い伝えがある。	城北地区愛称標識設置委員会『文化はぐくむまち・愛称標識』(城北地区愛称標識 設置委員会、1997年)	

中 24	築山御前と名残町	鹿谷町	昔、名残町という町があった。信康の正室徳姫による父信長への信康悪行の訴えにより、家康は信長から信康の切腹を命ぜられた。それを家康は受入れ、佐鳴湖畔で築山御前の命も奪った。最後は家康の家来による介錯で亡くなった。名残という町名の由来は、その築山御前の主従が名残を惜しんだことから付けられたとのこと。	御手洗清『家康の愉快な伝説101話』(遠州伝説研究協会、1983年)	本多隆成『定本徳川家康』(吉川弘文館、2010年)
中 25	太刀洗いの池	富塚町	天正7年(1579)8月29日、家康は正妻築山御前の殺害を、家来の野中三五郎に命じた。家康は織田信長と同盟を結び今川と敵対したため、今川義元の姪である築山御前を岡崎城の一隅に隠居させていた。信康の妻徳姫が父織田信長に築山御前と信康が今川方に通じて謀反を企てていると知らせたため、信長は家康に築山御前と信康の殺害を命じた。浜松に招かれた築山御前は、岡崎より浜名湖を渡り佐鳴湖の東岸小藪に着いたところで、野中三五郎に首を斬られた。その際に「怨霊となって祟り申さんぞ」と言ったという。浜松市広沢の西来院に築山御前の墓がある。	御手洗清『家康の愉快な伝説101話』(遠州伝説研究協会、1983年)	
			天正7年(1579)8月29日、築山御前は家康の招きで浜名湖を渡り、佐鳴湖の小藪に着いた。そこで家康の家来野中三五郎が短刀を渡して、命令でございませと自害をすすめた。御前は恨みをのんで、小藪の池で自刃した。御前が武田氏と結んで、織田・徳川を滅ぼそうとしていたという織田信長の疑いを晴らすために、家康は自害を命じたと伝えられている。御前の遺体は西来院に葬られたが、自刃に使った刀を洗った池はいつまでも濁ったままだった。そこで西来院の和尚様をはじめ、残った人たちが供養したところ、澄んだ水になった。この池を太刀洗の池と呼び、今でも佐鳴湖の辺りに名残りを留めている。	渥美実『浜松の伝説』上 シリーズ・わたしの散歩道4(ひくまの出版、1981年)	
			洗池は御前谷の内にあった。築山御前を殺害した時に刀をこの池で洗った。それから池の水が濁った。延宝6年(1678年)の秋、慰霊祭をしたところ、池の水が澄み切ったので、青池院殿と戒名をつけた。	小山枯柴『新版遠江の伝説』(羽衣出版有限会社、1995年)	杉浦国頭著・白柳友治編『曳馬拾遺：浜松の史蹟と伝説』(昭和堂書店、1955年)
			太刀洗いの池は家康の正妻築山御前が殺された地である。築山御前の子信康は、信長の娘徳姫と政略結婚した。夫婦仲は悪く、徳姫は姑とも不和だった。徳姫が築山御前に謀反の疑いがあると父に申し送ったという。築山御前の墓は、広沢の西来院にある。	『日本の伝説』30 静岡の伝説(角川書店、1978年)	
中 26	馬船と馬生	和合町	家康は川を渡るための船を用意するよう村人に命じた。船がなく困った村人は、何頭かの馬をかき集め、この馬を川に並べ船の代わりにして家康を渡したので、この地を「馬船」と呼ぶようになった。家康が少し下流で休んでいる時、身ごもった雌馬が仔馬を生んだ。この地を「馬生」と呼ぶようになった。	浜松市立高台公民館わが町文化誌編集委員会『大地と水と輝き わが町文化誌』(浜松市立高台公民館、1991年)	
中 27	築山御前殺害と可睡齋	元城町	家康は武田勝頼に内通したという疑いで、築山御前を殺害した。城を目前にして殺された築山御前が怨霊となり、夜な夜な浜松城の家康の寝所に現れた。家康は浜松の名僧を呼び祈祷させたが、怨霊は去らない。最後に可睡齋の等膳和尚が、怨霊を諭し立ち去らせた。家康は和尚を僧録司に命じ、東海道の曹洞宗寺院を支配させた。	読売新聞浜松支局編『新家康探訪』(東海電子印刷、1979年)	静岡新聞編『はままつ百話』第18巻(静岡新聞社、1975年)
中 28	くつわ淵	花川町	吉野の花川の水源地の池に、化け物が出るという噂があった。噂を見届けようと池に飛びこんだ村人が、馬の鬃を拾い上げた。村人は、祟りを恐れて池に戻した。昔、三方ヶ原の戦いの時、追われる徳川の侍が、馬に水を飲ませているとそこに敵が攻めてきた。急いで逃げようとして馬の鬃を池に落とした。鬃はその時のものと伝えられている。	浜松市立北部公民館活動推進委員会『しいの森・はぎの原 わが町の文化史』(浜松市立北部公民館、1987年)	
中 29	遠州大念仏	鹿谷町	三方ヶ原の戦いから2~4年の時が流れ、盆も近づき各村々で先祖の霊を迎えるため、お盆の準備が始められた頃、夜更になると犀ヶ崖の谷底から怨念のこもった呻き声や叫び声が聞こえてきた。さらに、農作物を食い荒らすイナゴや野ネズミの発生した。また近隣の村では疫病が大流行した。これらの巨災を鎮めるために岡崎から家康に同行した僧が大施餓鬼を行い、念仏を唱えそれらを鎮めることに成功した。	御手洗清『家康の愉快な伝説101話』(遠州伝説研究協会、1983年)	磐田市教育委員会文化財課『磐田の大念仏・豊岡の遠州大念仏・加茂大念仏調査報告』(磐田市教育委員会文化財課、2021年)
中 30	秀忠誕生橋と産湯の井戸	常盤町	分木橋の近くに誕生橋がある。ここは秀忠が産まれた誕生屋敷があった事にちなんでいる。この一帯は旧城内で家康の在城当時には、分器屋敷とも呼ばれていた。生母は西郷局で、同下屋敷で秀忠が誕生したと伝わる。産湯の井戸は明治のころまで残っていたそうである。なお、浜松城下絵図には「御誕生バ」として秀忠誕生の地が城内の二の丸に記されている。	浜松史跡調査顕彰会専門委員会『浜松の史跡』(浜松史跡調査顕彰会、1976年)	

中 31	的場ヶ丘	蜷塚一丁目	家康が兵馬の道場として、宗源院の境内に設けた的場、馬場などの跡である。家康は城から出て、ここでたびたび弓を放っていた。昭和の初めの頃まで、的場の土塁の周りには直径31cm以上の大松の林があったという。	城北地区愛称標識設置委員会『文化はぐくむまち・愛称標識』（城北地区愛称標識 設置委員会、1997年）	
中 32	忍冬酒	成子町	三河から家康に従い浜松の成子町に移住した神谷権兵衛が、忍冬酒を製造、家康に献上する。忍冬（スイカズラ）の花茎を用い酒造りを試みた結果、忍冬酒が生まれた。この酒の成分（利尿・解熱・健胃剤）に、健康を氣遣う家康はことのほか喜び、家康から土地・金子・刀を頂き、酒株の許可を与えられた。浜松城下で家康が愛飲していたことから、忍冬酒を求め遠方からわざわざ買い求める人も多かったという。参勤交代の為に東海道を往来していた諸大名も、競って求めたとも言われ、浜松を代表する酒であった。	浜松市立県居公民館わが町文化誌編集委員会『大地と水と輝き わが町文化誌』（浜松市立県居公民館、2000年）	
中 33	椿姫観音	元浜町	家康が遠江へ侵攻した時、浜松には飯尾連龍が守る引間城があった。飯尾連龍が誅殺された後、正室のお田鶴の方が城を守っていた。家康は開城を促したが、終に戦いとなり引間城は落城した。その時お田鶴の方・城兵・侍女は討死し、城の東北の畑の中に埋められた。そこに塚を作り椿を植えた為「椿屋敷」と呼び、後に、椿姫観音となった。	御手洗清『家康の愉快な伝説101話』（遠州伝説研究協会、1983年）	御手洗清『遠州伝説集』（遠州出版社、1968年）
			この塚は城の丑寅（東北）の方角の八幡村の西の椿屋敷というあたりにある塚である。永禄11年（1568）豊前守乗龍の後室が引馬の城にいたので、家康は使者を遣わして城の明け渡しと扶持の保証をしたが、後室は聞かず、戦いとなった。極月（12月）の末の4日の夜、塩市口より切って出て戦い、家康の兵は手負い死人合わせて三百人を出し、城兵も二百余人が討死した。後室は侍女十八人と切って出て、残らず一ヶ所で討死したと、板倉家の記にあるから、この塚は後室の塚であろう。しかし、ある人の記には、「これは大河内兵庫助の助の合戦で、時も代も違う。（中略）乗龍の北の方は今川家の出であるので、人質として駿河に行ったはずで、城にいたのは安芸守の妻などかもしれない。この塚のあるじは誰であろうか「ただ年々春草生い出で古墳何れの世の人ぞや」と顕基の中納言が作った詩も、そんな意味であろうか。	杉浦国頭著・白柳友治編『曳馬拾遺：浜松の史蹟と伝説』（昭和堂書店、1955年）	小山枯柴編著『新版遠江の伝説』（羽衣出版有限公司、1995年）
			むかし、引間の城に飯尾乗竜がいて、乗竜亡き後は奥方のお田鶴の方が城を守っていた。三河の徳川家康が使いを出し、従うようにすすめたが、お田鶴の方はきっぱりとはねつけた。家康に城を取り囲まれると、お田鶴の方はよろいこ身をかため、侍女をひきつれてなぎなたをかかえて敵陣に切り込み、討ち死にした。家康は現在の元浜町にあたる場所にその墓をたててとむらった。今、ここには椿姫観音堂が建立され、お田鶴の方をおまつりしている。その場所は、お田鶴の方が住まれた椿屋敷あとであるという。	渥美実『浜松の伝説』上 シリーズ・わたしの散歩道4（ひくまの出版、1981年）	
			永禄11年（1568）、徳川家康の引間城攻めにより、城兵はほとんど討死した。家康は使者を送り城の明け渡しを申し入れたが、田鶴の方は聞き入れずに侍女18人を連れて討って出て討死を遂げた。八幡町にある御台塚は田鶴の方と侍女の最期の地で、遺骸は家康の手で元浜町に葬られた。築いた塚に椿の木を植えたことから、椿姫塚と呼ばれるようになったという。	『日本の伝説』30 静岡の伝説（角川書店、1978年）	
中 34	稲葉山の監物狐	東伊場一丁目	平手監物は三方ヶ原の戦いで亡くなった。ずっと後世になってから、道に迷った者に負け戦を監物が語ったという。不思議に思って、武士の姿の監物をまじまじ見ると鎧の間から狐の尻尾が覗いていたという。	渥美実『浜松の伝説』下 シリーズ・わたしの散歩道5（ひくまの出版、1981年）	
			監物は稲葉山に隠れていたが、たまたま咳をしたため、敵に見つかり斬られてしまった。このため、地元では「平手さまは、咳止めの神様」と信仰されるようになり、咳が止まらないときは、平手さまに願掛けをする人も多かったという。ここに続く坂を地元では、監物坂とも呼んでいる。	県居地区愛称標識設置委員会『県居翁のさと愛称標識』（県居地区愛称標識設置委員会、1997年）	

中 35	肴町の特権	肴町	<p>家康は、魚の臭いが苦手だった。そこで、大手門の西で魚の商いをする者達に特権を与える代わりに、城から離れた街道筋の裏手に当たる肴町で店を開かせた。家康が浜松に入り城下町づくりが始まる。職人の町と同じように魚・塩・麴商を一か所に住ませたが、今の元魚町にいた魚商が増えたのと、城から遠いので現在の肴町に移された。</p>	<p>御手洗清『家康の愉快な伝説101話』(遠州伝説研究協会、1983年)</p>	
			<p>家康が浜松に入り城下町づくりが始まる。職人の町と同じように魚・塩・麴商を一か所に住ませたが、今の元魚町にいた魚商が増えたのと、城から遠いので現在の肴町に移された。</p>	<p>中央地区愛称標識設置委員会『出世城の城下町・愛称標識』(中央地区愛称標識設置委員会、1998年)</p>	
中 36	阿弥陀橋	高林五丁目	<p>武田に敗北し退却中、曳馬川の橋が武田により火をかけられ焼け落ちていた。家来たちは近くの常楽寺から本尊の阿弥陀如来像を持ち出し、橋の代わりとして横たえ家康を渡した。本尊は常楽寺に返されたが、本尊の背中には馬の蹄跡が残っていたという。</p>	<p>渥美実『浜松の伝説』上 シリーズ・わたしの散歩道4(ひくまの出版1981年)</p>	<p>東区まちづくり推進課東方見聞録編集委員会『東区の文化誌 東方見聞録』(東区まちづくり推進可、2011年)</p>
			<p>三方ヶ原の戦いの時、武田軍が乱入して常楽寺の阿弥陀仏を奪って橋にした。仏像の蓮華座も奪い馬たらいにした。阿弥陀様を奪って橋にしたので、阿弥陀橋といい、その付近を阿弥陀といった。後に阿弥陀仏は常楽寺に戻り、祀られている。</p>	<p>内山真龍『遠江風土記伝』(歴史図書社、1969年)</p>	
中 37	大將軍	曳馬	<p>この辺りを大將軍と呼んでいた。三方ヶ原の戦いにて戦死した武將が葬られていると伝わる。</p>	<p>曳馬地区愛称標識設置委員会『ひくまの歴史・愛称標識の由来』(曳馬地区愛称標識 設置委員会、1995年)</p>	

区名	伝承名	町名	伝承の内容	参考文献1	参考文献2
東 1	百姓家の家康	龍光町	徳川家康は龍光村の百姓の久蔵の家に逃げこみ、家の奥に隠れて助かった。家康は江戸幕府を開いた後、諸役を免除した。	御手洗清『家康の愉快的伝説101話』(遠州伝説研究協会、1983年)	
東 2	諸役の特許	龍光町	武田勢に追われた家康は、龍光村にたどり着き、村の百姓家に逃げ込んだ。家康は空腹だったので、百姓に食べ残りの麦飯を出してもらった。家康は麦飯を食べ、礼に何を望むか尋ねた。百姓は家康に諸役の赦しを話し、それ以後村の諸役は一切免除になったという。	御手洗清『家康の愉快的伝説101話』(遠州伝説研究協会、1983年)	
東 3	家康の手形	豊町	倉中瀬村の百姓が、天竜川で舟で投網をしていたところ、葦の茂みに家康が隠れていた。敵に追われていた家康は、川を渡すように百姓に頼んだ。川を渡した後、家康は百姓が持っているひしゃくの水(水を入れる部分)に墨で手形を押した。後日百姓はそれを持って浜松城へ行くと、沢山の褒美をもらった。	御手洗清『家康の愉快的伝説101話』(遠州伝説研究協会、1983年)	
東 4	西泉寺	国吉町	家康は天竜川の東での武田との戦いに敗れ、池田村の善右衛門の船で天竜川を渡り半場新田に着いた。家康は西泉寺観音堂で休息、浜松城へ無事帰城した。観音堂は現在はなく、その跡には本堂が建てられている。	みらいねっと浜松『未来につなぐ地域と人・歴史』浜松市東区の魅力(みらいねっと浜松、2021年)	
東 5	阿弥陀如来の軍略	半田山四丁目	三方ヶ原の戦いに敗れた家康は、竜泉寺の阿弥陀堂の中に隠れた。阿弥陀如来を信仰する家康は、熱心に如来仏を拝んだが戦いの疲れが出て思わずまどろんでしまった。すると夢の中に阿弥陀如来が現れ家康に軍略を授けた。その軍略とは、普濟寺を焼き浜松城が焼けたと見せて敵を欺き、犀ヶ崖に布の橋をかけ敵を倒す、というものであった。家康はすぐに浜松城に帰り、その軍略を実行した。	御手洗清『家康の愉快的伝説101話』(遠州伝説研究協会、1983年)	
東 6	妙恩寺	天龍川町	三方ヶ原の戦いに敗れた家康は、橋羽の妙恩寺に逃げ込んだ。住職の日豪上人は家康を天井裏に隠し武田勢からかくまった。武田勢がいなくなった後に家康は住職から食事をもらい浜松城に無事帰った。戦いの後、家康は住職を城に招き、その時のお礼として「丸に二引の紋」を与えた。これは、椀に箸を乗せた形で、今でも妙恩寺はこの紋を用いている。	御手洗清『家康の愉快的伝説101話』(遠州伝説研究協会、1983年)	
			三方ヶ原の戦いに敗れた家康は、橋羽の妙恩寺に逃げ込み、住職日豪上人に天井裏にかくまってもらった。住職からご飯を頂き浜松城に無事帰った。戦いの後、家康公は住職を城に招き、その時のお礼として「丸に二引のもんどころ」を下された。これはお寺で頂いたご飯のお椀に箸を乗せた形を取ったもので、今でも妙恩寺はこの紋を用いている。	渥美実『浜松の伝説』上 シリーズ・わたしの散歩道4(ひくまの出版1981年)	
東 7	有玉下村組頭長五郎家由緒	有玉南町	有玉下村の長五郎の先祖は、三方ヶ原の戦いの前哨戦である三ヶ野橋の合戦の時、家康の家臣と親戚だったので参戦し、家康の危機を救った。天保15年、長五郎は、庄屋伊兵衛達と名を連ねて、自分の家に門を建てる許しを幕府に願い出たが、許されなかった。	浜松市役所『浜松市史』史料編3 有玉村高林家諸用記(浜松市、1959年)	
東 8	阿茶局と十七夜街道	中郡町	家康は阿茶局を万斛村の鈴木権右衛門の家に預け、鷹狩りの時に立ち寄った。阿茶局は時折、笠井新田の十七夜観音堂にお参りしていた。そのとき通った道を「十七夜街道」と呼んでいる。当時の道路幅は一間(1.8m)以内だったが、この道路は特別に二間以上あったという。	みらいねっと浜松『未来につなぐ地域と人・歴史』浜松市東区の魅力(みらいねっと浜松、2021年)	
東 9	竹山の名字	天王町	庄屋の初代太郎左衛門は、鷹狩りで時々やってきた家康から、竹やぶに囲まれた屋敷に因み、竹山という名字を頂いた。家康が鷹狩りの時ぐった長屋門、馬をつないだ桶、鷹を止まらせた梅もあった。	みらいねっと浜松『未来につなぐ地域と人・歴史』浜松市東区の魅力(みらいねっと浜松、2021年)	
			宝暦年間(1751～64)に書かれた系図に徳川家康は竹藪に囲まれた太郎左衛門屋敷を「竹山々々と呼給」、そのため太郎左衛門はそれまでの高森の名字を「竹山」と改めた。	竹山恭二『平左衛門家始末』浜松・竹山一家一族の物語(朝日新聞社、2008年)	

東 10	甘露寺の梅	中郡町	浜松城に入城した家康は、良い名前の村を探そう家来に命じた。家来は万斛(まんごく)という名の村を見つけた。家康はこの名をたいそう気に入り、この村の庄屋鈴木権右衛門の家に阿茶局を預けた。また東隣の甘露寺の名前もたいそう気に入り、時々立寄りその寺の梅の木を珍重し「甘露梅」と名付けた。	御手洗清『家康の愉快な伝説101話』(遠州伝説研究協会、1983年)	
東 11	御手洗の名字	豊町	三方ヶ原の戦いの前、武田軍に城を囲まれた二俣城代中根正照は、家康に援軍を求めた。家康は兵を率いて天竜川を北上したが、その夜、水路を絶たれ二俣城の兵は退却した、との伝えがあり、浜松城へ引き上げることとなった。家康一行が倉中瀬村に来たところで夜が明けてきた。家康は、倉中瀬村の庄屋戸右衛門に朝食の支度を命じ家来と共に食べた。食事を終え、家康が用を足すと、庄屋は手洗いのために井戸水を汲んできた。家康は今朝のお礼に、庄屋に御手洗の名字を与えた。	御手洗清『家康の愉快な伝説101話』(遠州伝説研究協会、1983年)	御手洗清『遠州伝説集』(遠州出版社、1968年)
東 12	有玉神社と流鏑馬神事	有玉南町	家康は大坂より帰陣した後、秘蔵の馬を有玉の神社に奉納した。有玉の神社では、それ以来四百年間現在に至るまで、流鏑馬神事が続けられている。敵の弓矢をかわす家康になぞらえ、頭上で弓を廻す「弓張りの儀」が行われる。	みらいねっと浜松『未来につなぐ地域と人・歴史』浜松市東区の魅力(みらいねっと浜松、2021年)	
東 13	仙太郎灸	上新屋町	三方ヶ原の戦い後、浜松城の家康は、背中にひどい腫物の疔(ちょう)が出来て大変苦しんだ。本多重次が浜松の上新屋の仙太郎灸がよく効くということで、仙太郎を城に呼んで家康にお灸をすえさせたところ、二日たつと痛みがとれ全快した。礼として早速上新屋に仙太郎の家を建ててやった。	御手洗清『家康の愉快な伝説101話』(遠州伝説研究協会、1983年)	
東 14	信玄街道と大菩薩坂	有玉西町	大菩薩坂は三方ヶ原の戦いの時、武田信玄が三万の大軍を引いて登ったと伝わる坂である。「信玄街道」は、染地川の穴下坂を登り、集落を経て追分へ通じる道で、武田信玄が三方ヶ原の戦いの時徳川家康を攻めるのに利用した。	みらいねっと浜松『未来につなぐ地域と人・歴史』浜松市東区の魅力(みらいねっと浜松、2021年)	
東 15	定明寺	笠井町	定明寺は、武田勝頼に仕えた笠井城主の笠井備後守定明、肥後守高利父子を開基とし、笠井城の跡に建てられた。最初の寺号は貞明寺であったが、元亀元年に定明寺に改められた。長篠の合戦で高利は討死し、笠井父子の位牌が本堂に祀られている。文禄年間に火災で記録等一切が焼失した。	浜松市立笠井公民館わが町文化誌編集委員会『笠井 わが町文化誌』(浜松市立笠井公民館、1993年)	
			笠井城主笠井備後守定明が城の跡に寺を建て、その息子備後守高利は武田勝頼に仕え、長篠の合戦で勝頼の身代わりとなり討死した親子の位牌が本堂に祀られている。	みらいねっと浜松『未来につなぐ地域と人・歴史』浜松市東区の魅力(みらいねっと浜松、2021年)	
東 16	千人塚	有玉西町	三方ヶ原の戦いのことや討死した将軍のことが碑に刻まれている。	みらいねっと浜松『未来につなぐ地域と人・歴史』浜松市東区の魅力(みらいねっと浜松、2021年)	

区名	伝承名	町名	伝承の内容	参考文献1	参考文献2
西 1	宿蘆寺	庄内町	家康は戦いに負け浜名湖の畔まで逃げて来た。あたりはすっかり暗くなっていた。やっと安心してできると、急に眠気に襲われた。家来が寝る所を探したが、蘆が茂っているばかりでなにもない。すると遠くに森が見え、近づくと寺があった。ところが山門をたたいても奥深い山の中で静まりかえって返事がない。その時、家来が蘆の中に小舟を一艘見つけた。家康はその中でゆっくりと寝ることができた。翌朝、宿蘆寺の和尚たちが家康を見つけ驚いてもてなした。この寺の名は宿蘆寺(蘆に宿る寺)という名であった。	御手洗清『家康の愉快な伝説101話』(遠州伝説研究協会、1983年)	渥美実『浜松の伝説』下 シリーズ・わたしの散歩道5(ひくまの出版、1981年)
西 2	田の草取り	伊左地町	家康は戦いに負け伊左地あたりを逃げていた。その時、田んぼで草を取っていた百姓が、自分の笠と蓑を家康にかぶせて隠してくれた。家康が田の草を取る真似をしていると、敵兵はそのまま行ってしまった。数年後、天下を取った家康はその男を呼び出し、広い土地を与えた。	御手洗清『家康の愉快な伝説101話』(遠州伝説研究協会、1983年)	
西 3	鳥浦獵師	村櫛町	家康は戦いに負け村櫛の村に逃げてきた。村櫛は浜名湖に突き出た半島であり、これより先に逃げられなくて困っていたところ、鳥浦という鴨とりの獵をする獵師の舟を見つけた。家康はその舟に乗せてもらい、無事対岸の宇布見の村へ渡ることができた。大喜びの家康は、獵師に「阿波四国」を与えると伝えたが、獵師はそれを食べる粟の「粟四石」と聞き違い、粟四石よりも鳥浦の獵を自分だけ行える権利が欲しいと言った。家康は獵師に鳥浦獵の御墨付きを書いて渡した。	御手洗清『家康の愉快な伝説101話』(遠州伝説研究協会、1983年)	
西 4	素麺谷	庄和町	夏の暑い日、戦いに負けた家康は庄内村の和田まで逃げて来た。朝から飲まず食わずの家康を見て、村人が近くの谷川で冷やした素麺を差し出した。生まれて初めて素麺を食べた家康は、その何とも言えないおいしさに大喜びしたという。それからこの辺りを「素麺谷」と呼ぶようになった。	御手洗清『家康の愉快な伝説101話』(遠州伝説研究協会、1983年)	渥美実『浜松の伝説』下 シリーズ・わたしの散歩道5(ひくまの出版、1981年)
西 5	安寧寺	雄踏町山崎	三方ヶ原の戦いで敗れ西走する家康は、安寧寺の和尚の助けで安寧寺の音無坂(見返り坂)を通り浜名湖へ落ちのびることができた。山崎の湖岸には対岸の村櫛の小舟が待っていた。後年、家康はこれに報いるため、寺より見渡す限りの田を寺領として与えた。その広さは四十七町歩と言われる。 また、家康は安寧寺清庵宗徹禅師への帰依が深く、聞法の師と仰いだ。禅師が布橋をかけることを発案したとも伝えられる。家康は和尚と親交を重ね、禅門の指導のみならず、兵学・易学についても学んだという。	静岡県雄踏町郷土資料部『雄踏町郷土資料報』301号(雄踏町、2002年)	
西 6	合戦場	和地町	上久保の平(ひら)一帯を「合戦場」という。多くの将兵が亡くなった三方ヶ原の戦いの合戦場の一つであったので、合戦場と呼ばれるようになったと言われている。	浜松市立和地公民館わが町文化誌編集委員会『和の里今むかし わが町文化誌』(浜松市立和地公民館、2000年)	
西 7	池野家と家康	湖東町	家康が武田勢に追われ逃げる途中、谷上村の庄屋池野荘(庄)兵衛宅に匿われ、難を逃れる事ができた。家康に礼に四国か、この前に見える八町四方の土地か、と聞かれた。庄屋は四国を四石と思い、土地を望み与えられた。	浜松市立和地公民館わが町文化誌編集委員会『和の里今むかし わが町文化誌』(浜松市立和地公民館、2000年)	
西 8	沢渡りの伝説	大山町	徳川の斥候十三騎と武田勢の伏兵が大山の沢渡りで一戦を交えた。追い詰められ逃げ場を失った徳川勢は、水が溜まり草が茂る泥深い池のようなところに踏み込み全滅したという。当時の大山村は十三戸で、合戦の間武田方になり、煮炊きをしていたと伝わる。	浜松市立和地公民館わが町文化誌編集委員会『和の里今むかし わが町文化誌』(浜松市立和地公民館、2000年)	
西 9	旗見	大人見町	大人見には小高い丘があって、そこに二本の老松が明治時代まであった。家康はその松に登って敵の旗を見たと言われている。いつの間にか「旗見」は、なまって、今では「あたり」と言われている。	御手洗清『家康の愉快な伝説101話』(遠州伝説研究協会、1983年)	

西 10	三ツ塚	深萩町	<p>三方ヶ原の戦いに勝利し三河に向かう武田軍に、三ツ塚付近で中川の豪族が戦を挑んだ。敗れて討ち死にした中川の武士達を、三つに分けて葬ったという。両側の大きな塚には、馬も葬られていると伝えられている。その後、馬を供養するために馬頭観音が建立された。</p>	<p>浜松市立庄内公民館わが町文化誌編集委員会『碧い湖と緑の半島庄内 わが町文化誌』(浜松市立庄内公民館、1995年)</p>
			<p>三方ヶ原の戦いの際、中川の百姓が家康の通行をさえぎり妨害した。その百姓と仲間は首を斬られ、三ヶ所に埋められた。以来、この場所を三ツ塚と言って、明治11年頃までは忌日には中川の村人達が、この三ツ塚に来て祭祀を行った。 また、仇討の果たし場でその死者の塚とも伝わる。</p>	<p>浜松市立和地公民館わが町文化誌編集委員会『和の里いま昔 わが町文化誌』(浜松市立和地公民館、2000年)</p>
西 11	栗谷坂	和地町	<p>栗谷坂の上に石塚がある。この辺りで、この地に住む栗谷と片瀬付近に住む佐藤という武将の一隊が、三方ヶ原の戦いの前衛戦として浜松城を目指す武田勢を迎え撃った。石塚は、この合戦での戦死者の塚といわれている。 また、栗谷と佐藤は仲が悪く石を投げあって戦い、たくさんの石が坂の上に積み上げられていたとも伝えられる。</p>	<p>浜松市立和地公民館わが町文化誌編集委員会『和の里今むかし わが町文化誌』(浜松市立和地公民館、2000年)</p>
西 12	九武士と鎧田	古人見町	<p>三方ヶ原の戦いで敗れ逃げた九人の武士が、生い茂った葦をかき分けると、前は湖であった。武士達は逃げ場がないと思い、鎧を離れた所に脱ぎ捨て、坂の途中にある洞穴に身を隠し敵の目を欺いたと伝えられる。今も「鎧田」という土地の名が残る。 また、桶狭間の戦いで敗れた今川の家来が、鎧を脱ぎ捨て土着した所であることから名付けられたとも云われる。</p>	<p>浜松市立伊佐見公民館わが町文化誌編集委員会『湖と花と緑の里いさみ わが町文化誌』(浜松市立伊佐見公民館、1995年)</p>
西 13	馬葬地	平松町	<p>三方ヶ原の戦いで逃げ延びた武士が、馬に身を託し落ちのびる途中、傷が深く息絶えた。村人はせめて馬を助けようと介抱したが間もなく死んだ。村人は武士と馬の墓をつくって 葬った。</p>	<p>浜松市立伊佐見公民館わが町文化誌編集委員会『湖と花と緑の里いさみ わが町文化誌』(浜松市立伊佐見公民館、1995年)</p>

区名	伝承名	町名	伝承の内容	参考文献1	参考文献2
南 1	曾布川の名字	東町	家康は戦に負けて逃げていると、現在の東町にあたる場所の水の多い田んぼに出た。家康が渡れずに困っていると、百姓が現れ背負って水が満ちた田んぼを渡してくれた。見ると、その川のような田んぼには、赤茶けたソブ(田渋、水アカ)がいっぱい浮かんでいた。百姓は家康からソブ川という名字をもらい、以後「曾布川」と名乗った。	御手洗清『家康の愉快な伝説101話』(遠州伝説研究協会、1983年)	
南 2	俵端(たわらんばし)	三島町	家康は三方ヶ原の戦いで敗れ、たった一人三島町のあたりまで逃げて来た。敵が追いかけてくるのを知り慌てた家康は、百姓が大勢で屋根の葺き替えをしているのを見つけ、助けを求めた。百姓は屋根に上がって俵端をかぶり、屋根葺きの真似をしているように言った。敵兵がやってきたが、まさか浜松城主の家康が屋根葺きをしているとは思わず、そのまま通り過ぎて行った。この家を「三島の俵端」と呼び褒めたたえた。 ※俵端(たわらんばし:米俵の両側にあてる蓋)	御手洗清『家康の愉快な伝説101話』(遠州伝説研究協会、1983年)	渥美実『浜松の伝説』上 シリーズ・わたしの散歩道4(ひくまの出版1981年)
南 3	めでたい夢	三島町	家臣の天野康景が、武田の侵攻を心痛している家康の事を下女の八重に話すと、八重は「朝風に、浜の松並緑まし 竹たえだえのあくる年かな」との歌を作ったと言う。三島の阿弥陀寺の僧が「松平殿が栄え、武田は絶える」と解釈した。康景は家康に言上すると家康は励まされ戦った。信玄は合戦後病死した。	御手洗清『家康の愉快な伝説101話』(遠州伝説研究協会、1983年)	
			家康は信玄との戦いに苦しんでいた。ある日、家来の天野康景の下女が夢の中で歌を詠んだと康景に伝えた。康景は驚き、三島村の阿弥陀寺の僧にその夢を占わせると、詠んだ歌は徳川の繁栄と武田の滅亡を啓示していると言上した。康景はそのことを早速家康に伝えた。後年、この寺で百韻の連歌、具足の祝いを行うのを嘉例とした。	会田文彬『浜松風土記』(浜松出版社、1953年)	
南 4	飯田に住んだ武士	大塚町	家康の家来の梶田基市正統は、天竜川を隔て武田軍と対陣した。天竜川の中洲に馬を乗り入れ、武田軍の一騎を討ち取り、その首を家康に差し出した。正統は褒美として、鎧と槍、さらに大塚村と鶴見村の土地をもらった。そして大塚に住み、大塚郷左衛門と名乗った。	浜松市立東部公民館わが町文化誌編集委員会『輝きなほはたの音 わが町文化誌』(浜松市立東部公民館、1988年)	
南 5	武田水軍と中島氏	高塚町	家康は家来の中島重次に、遠州灘沖に出没する武田水軍の物見を命じた。重次は家来十数人と舞坂湊から船に乗った。すると海上で武田勢と遭遇し、奮戦したが討死した。重次の遺骸は白羽湊から鎧橋まで船で運び、能濟寺に葬られた。 重次の子の重好は、関ヶ原に従軍し、三河渥美の大崎を賜り、大崎城主中島氏の祖と云わる。	浜松市立可美公民館わが町文化誌編集委員会『美しがる可き里 わが町文化誌』(浜松市立可美公民館、2005年)	
南 6	鷹狩と鏡餅	参野町	家康は鷹狩に出て、津毛利神社に立ち寄り、祭りの焚火で暖を取った。家康は神前に供えた鏡餅を食べて喜び、「住吉とこの松かげに立ちよれば萬代経べきこちこそすれ」と歌を詠み、神社に奉納した。これ以来、津毛利神社の祭礼には鏡餅が供えられるようになった。	浜松市立南陽公民館わが町文化誌編集委員会『水と光と緑のデルタ わが町文化誌』(浜松市立南陽公民館活動推進委員会、1991年)	

区名	伝承名	町名	伝承の内容	参考文献1	参考文献2
北 1	祝田の名字	細江町中川	戦いに敗れた家康は、本多平八郎を連れ都田川のほとりを走っていた。家康は近くにいた百姓に舟を出すように頼んだ。百姓は船頭となって向こう岸まで渡してくれた。それでこの土地を「船頭」と言うようになった。家康は礼に、後ろにいた家来の本多の名字を与えようとしたが、百姓が「ほんだ」を「ほうだ」と聞き違えて祝田と名乗った。この地を祝田といい、祝田の名字の家もある。	御手洗清『家康の愉快な伝説101話』(遠州伝説研究協会、1983年)	いにしへの町づくりの会『切り絵で伝える歴史散策 姫街道の町』(いにしへの町づくりの会、2012年)
北 2	寸座峠	細江町気賀	家康がここに来た時、見事な景色に見とれ一休みしたことから、寸座と呼ばれるようになった。坂上田村麻呂や藤原氏の落人が休んだことから名付けられたという説もある。	御手洗清『家康の愉快な伝説101話』(遠州伝説研究協会、1983年)	
北 3	陣座峠	引佐町狩宿	家康は井伊谷の豪族、近藤石見守康用を案内者とし、岡崎から浜松へ向かっていた。小畑(おばた)・黄柳野(つげの)を経て遠江との境となる峠に来て、陣を敷いた。この峠は陣座峠といわれるようになった。	御手洗清『家康の愉快な伝説101話』(遠州伝説研究協会、1983年)	
北 4	丸山	新都田	三方ヶ原の戦いの時に武田信玄の本陣が置かれた場所と伝わる。	杉浦国頭著・白柳友治編『曳馬拾遺：浜松の史蹟と伝説』(昭和堂書店、1955年)	三方原開拓150周年記念祭実行委員会『みかたはら三方原開拓150周年記念誌』(三方原開拓150周年記念祭実行委員会、2019年)
北 5	目通り八町	細江町気賀	家康は、今川方に属する堀川城を攻めていた。家康は堀川城の様子を見ようと唯一人、油田の松崎という所に来た。茂っている葎の中に隠れ様子をうかがっていると、敵兵に見つかってしまった。急いで山の中に逃げ、一軒の百姓家を見つけ助けを求めた。家康は、この家の老婆が指す大かまどの中に潜り込んで助かった。家康が礼に何がいかと聞くと、老婆は見える限りの広い土地(目通り八町)が欲しいと答えた。家康は、その事を書いたものを老婆に渡すと、そのまま立ち去った。この老婆の家は細田奎右衛門(ほそだもくえもん)家で、その広い土地のために代々富み栄えた。油田の後ろに「もつくう山」という名の山がある。奎右衛門の山であつたらしい。	御手洗清『家康の愉快な伝説101話』(遠州伝説研究協会、1983年)	
			堀川城攻めで、家康は大勝利をおさめたが、戦いの途中はなかなか困難で、幾度か生死の境にあるほどであった。ある時、家康が堀川城の様子を見ようとただ一人、油田(あぶらでん)の松崎に来た。そこを敵兵に見つかってしまい、急いで山の中へ逃げ、一軒の百姓の家に助けを求めた。その家の老婆が示したかまどの中にもぐり込んで隠れ、敵兵に見つからずに助かった。後日、家康は老婆を訪ね、お礼に何か欲しいかを尋ねると、老婆は「目通り八町」(目に見える限りの八町四方の土地)と答えた。家康はそのことを書いたものを老婆に渡して、その場から去った。	いにしへの町づくりの会『切り絵で伝える歴史散策 姫街道の町』(いにしへの町づくりの会、2012年)	
北 6	堀川城・獄門巖	細江町気賀	堀川城は今川氏への忠心が強かった気賀の村人たちによって築かれた。永禄十一年三河の岡崎城から遠江に侵攻した家康は、翌年の三月、干潮を見計らい三千の軍勢で堀川城に攻めかかった。堀川城の城兵二千人の大半は、老若男女が入り交じる武装した村人だった。抵抗したが一日で落城となった。後日、討ち取られた者の首は都田川の土手に並べられたと伝えられている。この地は獄門巖と呼ばれている。	御手洗清『続遠州伝説集』(遠州出版社、1974年)	
			佐久城城主浜名氏は家康との交渉がうまくいかなかったが、徳川にはかなわないと、城を明け渡して徳川に従った。堀川城は永禄11年(1568年)に三河から遠江に侵攻した徳川家康に、翌年の3月、干潮を見計らい3千の軍勢で堀川城を攻められた。堀川城の城兵2千人の大半は、老若男女が入り交じった武装した農民だった。抵抗したが1日で落城。後日、家康は籠城抗戦を主導した者たちを惨殺し、都田川の土手に首を並べたと伝えられている。この地は獄門巖と呼ばれている。	土のいろ集成刊行会『土のいろ集成』第8巻(ひくまの出版、1984年)	浜松市博物館『浜松市博物館報』第31号(浜松市博物館、2019年)

北 7	大福寺納豆	三ヶ日町福長	大福寺の寺伝によると、家康は遠江入国後、大福寺の納豆を浜松城に献上させた。正月に諸武將を招いた時に、食膳には必ずこの納豆を添えたという。大福寺から城へ納豆が届くのが遅れると、家康は待ち焦がれ、「浜名の納豆はまだか」と家来に言った。このことから、浜名納豆と名付けられたと伝わる。	読売新聞浜松支局編『新家康探訪』(東海電子印刷、1979年)	
北 8	精鎮塚・オンコロ様	三方原町	精鎮塚はかつて本坂道の権七付近にあって、三方ヶ原の戦いの戦死者を慰霊するために建てられた。現在は、三方原町の本乗寺にある。 オンコロ様も三方ヶ原の戦いの戦死者を祀っている。今は引佐町中川の中川寺に移設されている。	三方原開拓150周年記念祭実行委員会『みかたはら三方原開拓150周年記念誌』(三方原開拓150周年記念祭実行委員会、2019年)	
北 9	仏坂古戦場とふろんぼ様	引佐町伊平	仏坂は三方ヶ原の戦いの前哨戦と言われる戦いが行われた場所である。 遠江に入った武田方の山県昌景の軍勢と、徳川方の井伊谷三人衆の軍勢が、仏坂で戦いとなった。この戦いで井伊谷三人衆の軍勢は敗れ、多くの武將が亡くなった。近くに両軍の戦死者の墓といわれる「ふろんぼ様」があり、現在も地域の皆さんによって供養が行われている。	池田利喜男『伊平史話と伝説』(伊平の歴史と文化を守る会、1992年)	
北 10	九月の節句なし	細江町気賀	細江町油田の堀川城での戦いで、負けた城将・城兵のすべてが殺された。堀川城の城主尾藤・竹田・齋藤はこの辺りの大地主であった。百姓の大部分は小作百姓であったため、大地主に従い共に城に籠った。 九月九日、徳川勢に呉石で惨殺され、この辺りは女子供のみとなってしまった。その日は重陽の節句だったため、それ以降このあたりでは節句の祝いはしない。	御手洗清『続遠州伝説集』(遠州出版社、1974年)	小山枯柴編著『新版遠江の伝説』(羽衣出版有限会社、1995年)
北 11	古城の怪	三ヶ日町都築	家康は今川家が衰えてきたので、遠江入りをした。しかし、浜松城に向かう途中の佐久城、堀川城は固く守っていたため、家康はこの二城を回避する道を選び浜松城に入った。 反旗をひるがえすこれらの城は家康にとって目の上の瘤であった。そこで、佐久城攻めを行うこととし、本多忠勝を使者にして、城を明け渡すように伝えた。佐久城内では軍議をしたが中々決しなかった。しかし、城内から逃げだす者が多く出たので、城主浜名頼近はとうとう城を明け渡すこととした。 この城主には一人の美しい姫がいて、戦わずに城を明け渡すことを嘆き悲しみ、大蛇となり永くこの地の守護となろうと堀の中に飛び込んで消えた。その後、城跡の堀には十メートル余りの大蛇が住み、村人の目に触れることが時々あったという。	御手洗清『遠州伝説集』(遠州出版社、1968年)	

区名	伝承名	地区名	伝承の内容	参考文献1	参考文献2	参考文献3
浜北 1	家康と田植え	根堅	家康は武田軍に追われ、上海土の佐田家に飛び込んだ。家康は、風呂桶の中に隠れ、家来は佐田家の人々と蓑傘姿で田植えをして隠れ助かった。その夜、密かに浜松城に遁逃した。数年後に家康は佐田家に恩賞として耕地を与えた。	静岡県立浜名高等学校史学部『伎倍』第8号(静岡県立浜名高等学校、1980年)		
浜北 2	家康と大楠	根堅	岩水寺境内にある金城稲荷の楠の大木は、市指定天然記念物に指定されている。家康がこの御神木に身を潜め敵から逃れたと伝わり、「厄逃れの御神木」と名付けられている。家康は、健康長寿や浜山の子宝に恵まれ、岩水寺の総本尊の薬師如来、本尊の厄除子安地蔵への帰依が厚かったという。	静岡県立浜名高等学校史学部『伎倍』第8号(静岡県立浜名高等学校、1980年)		
浜北 3	代わり馬	尾野	尾野の山上に高根神社がある。古くから木像の馬頭観音が祀られていた。家康は三方ヶ原の戦いに敗れ浜松城へと向かっていたが、馬が木の根に躓き落馬してしまい困っていた。それを見た高根神社の神官が家康に馬を差し出し、家康は自分の馬と馬具を神官に与えた。以来、毎年2月の初午の日に村人達は馬頭観音にお詣りする。	御手洗清『家康の愉快な伝説101話』(遠州伝説研究協会、1983年)		
浜北 4	沼のいわれ	沼	家康の家来大田沼之助が開墾したことから沼新田と名付けられた。沼之助は石清水八幡宮から御霊分けし、沼八幡宮をこの地に創建した。この時、石清水八幡宮から真竹の苗を持ち帰り村の特産とし、浜松城主に献上した。	内山真龍『遠江風土記伝』(歴史図書社、1969年)		
			沼之介は、三方ヶ原の戦いで戦功を上げ、家康から肴町に屋敷をもらって住んだ。そのため肴町の辺りには「沼殿小路」という名があったという。沼之介は老後、沼の河原を開墾して沼新田と称してここにに移り住んだ。	御手洗清『続遠州伝説集』(遠州出版社、1974年)		
浜北 5	家康と山椒	新原	家康が新原に鷹狩りにやってきた時、新原の庄屋(115歳)と子が出迎えた。家康は親子の長寿を知り、その秘訣を聞いた。庄屋は、家には田がなく、畑の大豆・麦・稗を主食に、焼きみそに山椒を添えて食べていると答えた。数日後、庄屋より山椒の実と苗が家康の元に届けられた。家康は褒美に米を送り、毎日山椒の実を食べ、中泉の御殿の庭に山椒を植樹した。	御手洗清『家康の愉快な伝説101話』(遠州伝説研究協会、1983年)	御手洗清『静岡県西部の面白い伝説』(遠州出版社、1975年)	
浜北 6	鼻紙御朱印	宮口	宮口に灌頂山大覚寺という龍潭寺末寺の古い寺がある。いつの頃か家康は家来数名と宮口あたりを歩いていた。家康は喉が乾いたので、近くにあった大覚寺で水を所望した。老和尚は粗末な茶碗で茶を出した。家康は喜び、三杯飲んだ後、持ち合わせの塵紙に寺領四石を与えると書き、朱印を押して和尚に渡した。	御手洗清『家康の愉快な伝説101話』(遠州伝説研究協会、1983年)		
浜北 7	べんとう野	中瀬	三方ヶ原の戦いの数日前、家康は敵の様子を見に数人の家来と中瀬あたりにやって来た。家康は腹がへったので屋敷にしようと草原に腰掛け、弁当を食べようとした。それを見た村人がお茶やきび餅を差し入れた。家康は上機嫌で弁当を食べ、お茶を飲み、餅を食べて立ち去った。家康が弁当を食べたことから、このあたりを「べんとう野」と呼ぶようになった。	御手洗清『家康の愉快な伝説101話』(遠州伝説研究協会、1983年)	中瀬村郷土をよくする会『物語中瀬村村誌』(中瀬村郷土をよくする会、1974年)	
浜北 8	一ノ瀬の名字	上島	家康は信玄軍の様子を見に出かけ、敵に見つかり逃げていた。天竜川の中洲で百姓の夫婦が草を刈っていた。家康が助けを求めると、夫は家康を背負って川を渡った。渡り終わると、妻が刈った草を家康にかけて見えないように隠した。敵は気付かず、西の方へと走って行った。家康は一つの瀬を渡した礼に、百姓に「一ノ瀬」という名字を与えた。	御手洗清『家康の愉快な伝説101話』(遠州伝説研究協会、1983年)	静岡県立浜名高等学校史学部『伎倍』第13号(静岡県立浜名高等学校、1987年)	中瀬村郷土をよくする会『物語中瀬村村誌』(中瀬村郷土をよくする会、1974年)
浜北 9	ろうそく村	中瀬	二侯城攻めの偵察を行うために城を出た家康と家来は、中瀬の辺りまで来た。疲れた家康は近くの百姓家で休んだ。家の者は湯茶や餅を差し出し心の限りにもてなした。家康は大いに喜び、足の疲れを労わってくれたことから、この村に礼として「労足村」という名を与えた。それが火を灯す「蠟燭」の字に変わり、「蠟燭村」になった。	御手洗清『家康の愉快な伝説101話』(遠州伝説研究協会、1983年)	静岡県立浜名高等学校史学部『伎倍』第13号(静岡県立浜名高等学校、1987年)	中瀬村郷土をよくする会『物語中瀬村村誌』(中瀬村郷土をよくする会、1974年)
浜北 10	御馬ヶ池のいわれ	於呂	家康は、二侯城攻めで武田軍の様子を見に来た。馬が汗をかき疲れていたため、於呂神社の畔の池で馬を洗い、汗を流し休ませた。それ以来、この池とこの辺り一帯の地名を、「御馬ヶ池」とい言うようになった。於呂神社の神馬をこの辺りで飼っていたのでこの地名がついたとも言われている。	御手洗清『家康の愉快な伝説101話』(遠州伝説研究協会、1983年)		

浜北 11	暮れ・正月の習慣	西美箇	西美箇下の村では、武田勝頼の家臣であった先祖の富永藤九郎が、三方ヶ原の戦いで徳川方に敗れたのがちょうどオモッセ(大晦日)であったことから、暮れではなく、元旦の早朝に餅つきをする	『日本の民族』静岡 22(第一法規、1977年)	静岡新聞社『ふるさと百話』7(静岡新聞社、1983年)	
浜北 12	休兵坂	平口	三方ヶ原の戦いの時、信玄の軍は平口を通った。その時、三方ヶ原へ一気に登るために、この坂で兵を休めたので、「休兵坂」と呼ばれるようになった。	静岡県立浜名高等学校史学部『伎倍』第13号(静岡県立浜名高等学校、1987年)	細江町史編さん委員会『細江町史』通史編中(細江町、2000年)	
浜北 13	岩水寺の兵火	根堅	岩水寺は数度の火災や破壊に遭いながらも、七、八宇の僧院をもっていた。しかし、信玄軍の兵火を受け、本堂一宇と古仏三体以外は、僧院はもちろん、宝器も古文書もみな失ってしまった。	内山真龍『遠江風土記伝』(歴史図書社、1969年)		
浜北 14	新原のいわれ	新原	三方ヶ原の戦いの前、天竜川を渡った武田軍は、中瀬から新原辺りに駐屯することとなった。信玄の家来の新原弥左衛門尉村一が、ここに駐屯したことが新原の始まりとされる。後に村一は家康に奉公することとなり、家康からこの地を買い、その時自分の名字を村の名前にした。	神谷昌志『遠江の史話』(静岡新聞社、1990年)	『浜北市史』通史上巻(浜北市、1989年)	
			武田の家臣新原弥左衛門は、三方ヶ原の戦いのあと、高林弥三左衛門、戸田九左衛門、山田権右衛門、平松幾右衛門、江間喜右衛門と共に刀を鋤に持ち替えて開拓して村を作り上げた。瑞応寺の開基であり位牌・墓碑・過去帳がある。位牌には浜松在城時の家康に奉公した事が記されている。	細江町史編さん委員会『細江町史』通史編中(細江町、2000年)		

区名	伝承名	町名	伝承の内容	参考文献1	参考文献2
天竜 1	毘沙門堂	二俣町二俣	毘沙門堂の一带は、二俣城を巡り家康と武田勝頼が戦った時に、本多忠勝の陣が置かれた場所だと言い伝えられている。今でも栄林寺裏山には堀切や車輪跡が残っている。	天竜市商工観光課『ふるさと歴史ガイドブック』二俣光明編(天竜市役所、2001年)	
天竜 2	いくさ道を作った只来衆	只来	光明山の小豆坂は茅が多く茂り、谷底が深く、一步踏み間違えれば命を落としかねない険しい道だった。そこで只来の人々は、茅を刈り取りいくさ道を開いた。徳川軍は村民が拓いたいくさ道を使い、小豆坂から攻め込み、光明城を攻め落とした。家康は大変喜んで、只来村の庄屋を呼んで厚く礼を言い、村の人たちを「只来衆」と呼び讃えた。	横山武雄『歴史を学ぶふるさとのほなし』(静岡同好通信社、1974年)	
天竜 3	ほうびの陣羽織	両島	阿多古十三カ村、奥山五カ村の百姓百名が鉄砲隊を組織して、大坂冬の陣、夏の陣の合戦に従軍し勝利した。従軍した百姓達に、家康から土地と土地を与える事を示す書付が送られ、年貢も免除された。出陣の功として家康から「ほうびの陣羽織」一領が贈られた。	上阿多古草ふえ会『ふるさとものがたり天竜』(上阿多古草ふえ会、1987年)	
天竜 4	鐘鋳場とつり鐘	神沢	大坂夏の陣の時、徳川方は多くの将士が参陣した。浜松城主は阿多古川流域の村々18ヶ村に総動員を命じた。参加した村人は多くの戦功を立て褒美をもらい凱旋してきた。戦いに加わった者は無事戻れたことに感謝し、明泉寺に釣鐘を鑄造して奉納した。その後この鐘は、村の旱魃の時に阿多古川の淵に沈め祈ると必ず雨が降るようになった。	御手洗清『続遠州伝説集』(遠州出版社、1974年)	
			鉄砲隊として家康に参陣した村人は、記念に釣鐘を鑄て峰神沢の明泉寺へ寄進をした。この釣鐘を阿多古川の淵に沈めて雨ごいをする、必ず雨が降った。火事でこの釣鐘はこわれ、売られてしまった。村人達は釣鐘を鑄た「鐘鋳場」に石碑を建立し、五穀豊穰、村中安全を祈った。石碑の前で雨ごいをすれば、必ず雨も降るようになったという。	上阿多古草ふえ会『ふるさとものがたり天竜』(上阿多古草ふえ会、1987年)	
天竜 5	阿多古の鉄砲隊	西藤平	武田軍300の別働隊が、鳳来寺辺りから小豆坂に向け、山づたいに光明山に向かっていった。この武田の別働隊を、阿多古鉄砲隊は山中で待ちうけ、大半を撃ち殺した。郷士富部彦左衛門とその子又兵衛、中村の坪井右京進ら阿多古鉄砲隊の働きは家康の耳にも達し、諸役御免の朱印状が与えられた。	横山武雄『歴史を学ぶふるさとのほなし』(静岡同好通信社、1974年)	
天竜 6	筏流しと兵糧米	船明	家康は、信州の領地から浜松までの兵糧米の運搬に頭を悩ませていた。配下の船明の者から運搬には筏を使うと聞き、家康は早速筏の手配をし、兵糧米を無事浜松城に運び込んだ。 北遠の天竜川流域がすべて家康のものになると、何者にも妨げられる心配なく、兵糧米は浜松城に無事に運び込まれることとなった。	上阿多古草ふえ会『ふるさとものがたり天竜』(上阿多古草ふえ会、1987年)	
天竜 7	光明勝栗	只来・山東	家康は只来城・二俣城を攻めたが、武田軍の守りは固く落城しなかった。それ知った光明寺の高継和尚は、家康に二俣城に続く間道を教え、家康はその道を通り、激戦の末ついに城を落とすことができ大喜びであった。 高継和尚は、只来村の者に、家康に搦栗を献上させた。その栗を見た家康は、「光明搦栗」は「功名勝栗」で縁起が良いと村人に褒美を与えた。 勝栗は毎年明治になるまで江戸城に届けられた。	御手洗清『遠州伝説集』(遠州出版社、1968年)	
			光明寺の高継和尚は、家康に乾栗を呈して戦いの労を慰めた。家康は「光明乾栗則ち光明勝縁」と大いに喜び、奥之院に天下泰平を祈願をした。その後、家康は和尚を伏見城に呼び、兜の内に入れて守神とした摩利支天像を、光明山奥之院に合祀するように命じた。光明山を徳川家代々の祈願所とする朱印を賜り、以後歴代將軍の手厚い保護を受けた。	『光明山由来書』(金光明山 光明護国禪寺)	
			勝栗伝説は『遠江風土記伝』の中の山東の項で「只来村之に准ず」。只来の項で「山東村に同じ」。光明寺の項では「栗を献ずる百姓の名字を賜ふ、乗吉、森知加、信近、長信是なり、山東只来の節の如し」とある。	内山真龍『遠江風土記伝』(歴史図書社、1969年)	

天竜 8	隠れ岩と小豆坂	横川	家康は勝頼との戦いで光明山に逃げ込み、洞窟に隠れた。一方勝頼は空腹だったので、百姓家に駆け込み百姓に早く煮える物を出すよう命じた。ところが百姓は煮るのに時間がかかる小豆の塩煮を作った。勝頼は小豆が煮えるまで百姓家で休息をとった。それを知った家康は急いで洞窟を出て、浜松城に無事帰る事ができた。 家康が隠れた洞窟を「隠れ岩」、両者が戦った坂を「小豆坂」と呼ぶようになった。	上阿多古草ふえ会『ふるさとものがたり天竜』(上阿多古草ふえ会、1987年)	
天竜 9	権現森・お手付き岩・お手付き坂	船明・大川	家康は、勝頼との小豆坂での戦いで苦戦となり、光明山中を逃げ回り、やっと船明へやってきた。疲れ果てた家康が身を隠して休んだ森を「権現森」、急な坂道に思わず手を付いた岩を「お手付き岩」、その坂を「お手付き坂」と呼んでいる。	上阿多古草ふえ会『ふるさとものがたり天竜』(上阿多古草ふえ会、1987年)	
天竜 10	腰掛石・梯子坂	横川	光明寺の高継和尚の案内で、家康が険しい坂道を梯子を付けて登った。その坂を「梯子坂」、光明寺奥の院に着いた家康が、腰を掛け休息をとった石を「家康の腰かけ石」と呼ぶ。百姓が光明の搦栗を差し出すと「功名勝栗」と家康は大いに喜び、百姓四人に名字を与え、光明の山東と只来は諸役が免除された。	上阿多古草ふえ会『ふるさとものがたり天竜』(上阿多古草ふえ会、1987年)	
天竜 11	身代わりの鐘	横川	光明山にほど近い小豆坂での戦いで、家康は士気を鼓舞する為に、家来に光明寺の梵鐘を乱打させた。武田勢は鐘の音を目がけ鉄砲を撃ち、矢を放ち、石を投げた。梵鐘は弾や矢を受けて傷だらけになった。戦いに勝った後、家康はこれを見て、自分の身代わりになった鐘と喜んだ。以来、この鐘は「家康の身代りの鐘」と呼ばれる。	御手洗清『統遠州伝説集』(遠州出版社、1974年)	
天竜 12	鑿森大明神	大川	小豆坂での戦いで引坂山の庄屋太郎右衛門は、家康から兜に付いていた竜頭の形の金の鑿(すず)を与えられた。それを聞いた法印という行者が、民家に置くのは勿体ないので、近くの明神様の祠に収め御神体として祀るよと言った。これを鑿森大明神として祀ったと伝わる。	青山千之助『竜川の伝説』第1集(青山千之助・竜川公民館、1969年)	
天竜 13	鞍掛の松・涼みの御所	二俣町鹿島	家康は二俣城が落城し浜松へ戻る途中、西鹿島の八幡宮神社の中に湧水池を見つけた。喉が渇いていた家康は、馬を止め腹いっぱい水を飲んだ。馬の鞍を側の松の木の枝に掛け、馬にも水を与え休ませた。そこで湧水池付近一帯の土地を「涼みの御所」、家康が鞍をかけた松を「家康鞍掛の松」と呼ぶようになった。	上阿多古草ふえ会『ふるさとものがたり天竜』(上阿多古草ふえ会、1987年)	
天竜 14	安達家	佐久間町相月	犬居城を守る天野氏に負けた家康は、逃げて安達家まで来た。安達家で休息し鬘を剃ってもらった家康は、見える限りの山を与えようと言った。しかし老婆が家康だとは気付かず、落ち武者のくせに大きなことを言う男だと思いこやりと笑ったので、家康は褒美は半分すると言った。 やがて、家康が天下を取ると、安達家には見渡す限りの山の半分が与えられた。	佐久間町教育委員会『さくま昔ばなし』(佐久間町教育委員会、1982年)	有賀競『秘境はるか塩の道秋葉街道』(有賀競、1993年)
天竜 15	桶屋(水窪町)	水窪町奥領家	家康が逃げてきたので、桶屋は家康を桶の中に入れて敵の目から隠した。家康が桶屋に褒美として何が欲しいかと聞くと、桶屋は次の仕事の家まで道具を運んで欲しいと答えた。	二本松康弘・静岡文芸大学『みさくぼの伝説と昔話』(三弥井書店、2017年)	
天竜 16	桶屋(佐久間町)	佐久間町相月	家康は敵に追われ桶屋に逃げ込んだ。爺さんは家康に茶を差し出した。茶を飲んだ家康はゆったりした気持ちになり、長い間鬘を剃っていないことを思い出した。婆さんが家康の鬘を剃ると、立派な顔立ちになった。礼に山を与えようと言ったが、逃げている姿に婆さんはこの話を信じなかった。家康は少し腹を立て、与える山は半分にする、と言い残して立ち去った。 やがて家康が天下を取ると、言葉通りに山を半分与えた。家康が少し休んだ事から、土地の人はこの家を「小休戸」と呼んだ。	佐久間町教育委員会『さくま昔ばなし』(佐久間町教育委員会、1982年)	
		佐久間町和泉	徳川と武田の戦いの時、敵に追われた家康は和泉まで逃げてきて、一軒の桶屋に逃げ込み、桶の中に隠れて難を逃れた。礼に何を望むかと家康が聞くと、桶屋は仕事の後片付けをしたくない、と答えた。家康は望みをかなえたという。	佐久間町教育委員会『さくま昔ばなし』(佐久間町教育委員会、1982年)	

天竜 17	二本杉と弁当野	佐久間町佐久間	家康は武田軍に追われ、河内川のほとりまで逃げて来た。しかし腹がすいてたまらない。急いで弁当を出して食べたが、もう敵兵が近くに来ている。半分食べ、残った弁当を包み、箸は地面にさして逃げた。この二本の箸が成長して二本杉になった。	御手洗清『家康の愉快な伝説101話』(遠州伝説研究協会、1983年)	御手洗清『統遠州伝説集』(遠州出版社、1974年)
天竜 18	こだま石	水窪町山住	山住神社の門前に「こだま石」という大石がある。家康が勝頼と戦った時、家康軍は犬居城主天野景貴の軍に敗れ、山住神社まで逃げてきた。勝ちに乗じた天野軍は喊声をあげて追ってきた。その喊声がこの大石にこだまし、家康の軍が盛り返したと勘違いした天野軍は驚き引き返した。お陰で家康は浜松に逃げ帰ることができたという。	御手洗清『家康の愉快な伝説101話』(遠州伝説研究協会、1983年)	御手洗清『統遠州伝説集』(遠州出版社、1974年)
天竜 19	信玄岩・身代わり梵鐘	春野町領家	信玄は秋葉山、家康は光明山に、陣を敷いて向かい合った。信玄に攻められた家康は、光明山の釣鐘の中に隠れた。はるか秋葉山よりそれを眺めた信玄は、七合目の大岩(信玄岩)を盾に強弓をもって釣鐘を射た。矢は釣鐘(身代わり梵鐘)を貫通したが、家康を傷つける事はできなかったようだ。	野崎正幸『秋葉山三尺坊大権現』(島津書房、1985年)	
天竜 20	桶屋(春野町)	春野町領家	秋葉山のすぐ側に和田之谷という所があった。そこに桶屋があり、家康は伏せた古桶の中に隠してもらい助かったという話が伝わる。	二本松康弘・静岡文芸大学『春野の昔話と伝説』(三弥井書店、2020年)	
天竜 21	半命の家康	春野町堀之内・森町三倉	家康は犬居城を攻めたが敗れて領家村に逃れた。家康は村人に助けられながら、森の三倉の半明まで逃げ、ある貧しい百姓家に逃げこんだ。この辺りには天野氏に味方する者達があった。天野方の者達がこの家を取り囲んだが、家康は縁の下に入って助かった。それ以来、家康が半分命が助かったというので、ここを「半命」と呼び、後に半明となった。また、家康は犬居の街をジグザクに逃げ回り、その通ったところが町となったため、今も犬居の町はジグザクの曲がりくねった町になっているのだという。	御手洗清『遠州伝説集』(遠州出版社、1968年)	
天竜 22	自害淵	春野町堀之内	昔、旧犬居小学校のところに瑞雲院があった。犬居城主天野氏は、家康を裏切って武田方に味方した。家康は瑞雲院の和尚に助けられ、命からがら逃げた。しかし家康に味方した和尚は忠霊塔下の淵で自害した。そのため、この地を「自害淵」と呼ぶようになったという。後に、寺は立派に再建され、紋も徳川家より与えられたと伝わる。	春野町老人クラブ連合会『ふるさと春野の回想』(春野町老人クラブ連合会、1988年)	
天竜 23	二俣城奪回	二俣町二俣	武田方の二俣城主依田信蕃は城をよく守ったが、食料が尽きてとうとう開城に追い込まれた。ところが開城当日はあいにくの雨だったので、信蕃は、蓑笠姿で城から去るのは情けないので晴れるまで待ってほしい、と家康に申し入れた。家康はこころよくそれに応じ、信蕃は雨が上がった翌日、静かに二俣城を去って行った。	上阿多古草ふえ会『ふるさとものがたり天竜』(上阿多古草ふえ会、1987年)	
天竜 24	皆原・稲原	二俣町二俣	二俣城を守る中根正照は、家康の許しを得て、武田方と人質を交換し二俣城を武田の手に渡した。二俣城が落ちる時、城内の一部の武士達は、城を敵の手に渡すのを拒み、城の北の曲輪に行き、腹をかき切って死んでしまった。「皆腹切った」ことから、ここを「皆原」と言ったが、いつの頃からか「稲原」となった。	御手洗清『続々遠州伝説集』(遠州伝説研究協会、1978年)	
天竜 25	山住神社	水窪町山住	家康は三方ヶ原の戦いに敗れ山住神社に逃れたが、武田軍が迫ってきた。その時、突然強風が吹き、地鳴りのような音が鳴り響いた。武田軍はその音に驚き退散したので、家康は難を逃れることができた。家康は、翌年山住神社にお礼参りをし、宝剣を奉納した。	静岡県水窪町『水窪』民俗資料調査報告書(静岡県水窪町、1968年)	
			山住神社には、家康が奉納した二振の刀剣が宝物として納められている。家康は、三方ヶ原の戦いで信玄に敗れた後、奉剣し、「丑寅の鎮守」として山住神社を信仰した。信玄の居城甲府躑躅ヶ崎が鬼門の丑寅の方位にあることから、浜松城の守り神社として山住神社を信仰したと伝えられている。	『みさくぼまるごとガイド』(みさくぼ観光ボランティアガイドの会)	
			元龜3年(1572)、家康は三方ヶ原の戦いの折、武運長久を山住神社に祈願した。戦いには敗れたが、神社の加護により一命難を逃れた。天正元年正月17日、家康は参詣のため再び山住神社を訪れ、その後奉納された二振の刀剣は宝物として納められている。	水窪町史編纂委員会『水窪町史』(水窪町、1983年)	

天竜 26	馬主神社	佐久間町相月	家康は浜松城への帰り道、相月の諏訪神社に立ち寄り必勝祈願をした。その後、家康は天下をとると「馬主神社」と書いた額を奉納した。	佐久間町教育委員会『さくま昔ばなし』（佐久間町教育委員会、1982年）	
天竜 27	年とり山	渡ヶ島	家康は武田の勢力が衰えてきたので、遠江の中で街道の拠点となる二俣の失地回復に乗り出した。家康が渡ヶ島の岩に向いた時、ちょうど大晦日だった。家康が、この山は自分がひとつ年をとった山と言ったので、その山を「年とり山」と言うようになった。	御手洗清『家康の愉快な伝説101話』（遠州伝説研究協会、1983年）	浜松市生活文化部生涯学習課『北遠の城』（天竜区魅力ある区づくり事業実行委員会、2009年）
			家康は遠江の中であって、どの方面への活動も可能になる、二俣の失地回復に乗り出した。渡ヶ島の岩に向いたとき、ちょうど大晦日となった。すると、「ああ、今日は大みそかであったか。それではこの山は、わしの年とり山じゃな」と、家康が笑って言ったので、その岩の山を「年とり山」と言うようになった。	上阿多古草ふえ会『ふるさとものがたり天竜』（上阿多古草ふえ会、1987年）	
天竜 28	筏乗り下げの特権	二俣町鹿島	家康は天竜川で何十本もの材木を、藤つるで頑丈に結わえ、二つも三つも連結して流れる筏を見た。家康はこれほどたくさんの筏を男が一人で操っていることに驚き、その者の名前を聞いた。男は鹿島村の孫尉（まごのじょう）と名乗った。家康は孫尉に「天竜川筏乗り下げの特権」を与えた。	上阿多古草ふえ会『ふるさとものがたり天竜』（上阿多古草ふえ会、1987年）	
天竜 29	今洲の渡し	二俣町鹿島	二俣城の偵察からの帰り道、家康が鹿島の渡船場（今洲の渡し）に来ると、船が無くなってしまった。武田方の仕業に違いないと困っていると、椎ヶ脇神社の神主孫之尉が村人を集め、またたく間に竹の筏を仕上げて家康に差し出した。おかげで家康は、無事浜松へ帰ることができた。その後、孫之尉は家康からたくさんの褒美と、今洲の渡しの渡船場支配者権を与えられたという。	上阿多古草ふえ会『ふるさとものがたり天竜』（上阿多古草ふえ会、1987年）	
天竜 30	百首塚	春野町堀之内	家康は犬居城を攻めたが、武田・天野軍との戦いに敗れ退却した。この首塚は徳川軍の武将を祀ったものと言われていて、鐘打山（犬居城）の麓にある。	春野町教育委員会生涯学習課『春野歴史ものがたり』（春野町、2001年）	
天竜 31	八朔の祝いはやらない	二俣町二俣	家康は旧暦8月1日（8月朔日）に江戸に入府し、二俣城主大久保忠世も小田原城に移り、二俣城は廃城になった。このため二俣村ではこの日を不祥の日とし、以後「八朔（はっさく）」を祝わなくなったと伝わる。他に、八朔の祝いをすると信康の怒りに触れて祟りがあるため八朔を祝わないという話も伝わる。	内山真龍『遠江風土記伝』（歴史図書社、1969年）	
			家康が江戸に入府した日が旧暦8月1日（八月朔日）であり、この日は諸侯諸士が総登城して將軍を拝し、農家でも「田面の節」といって豊作を頼む八朔の祝が行われていた。ところが、二俣では昔から八朔を祝わない。八朔にうかれていたのでは信康様の怒りに触れて、そのあたりが恐ろしいということか。	天竜市商工観光課『ふるさと歴史ガイドブック』二俣光明編（天竜市役所、2001年）	
			天正18年（武鑑、遠江風土記伝では8年）二俣城主大久保忠世は相州小田原城に移り、同年八月朔日（ついでに）に二俣城は廃城となった。このため二俣村ではこの日を不祥の日とし以後「八朔（はっさく）」を祝わぬようになったと伝わっている。	大場亀吉『壬生の芝原』天竜市郷土誌稿 第2集（天竜市文化協会、1967年）	
天竜 32	勝坂の伝説	春野町豊岡	家康が藤を採る女に名を問い、女が「お藤」と答えると吉報と喜んだ。井戸に案内された家康は、水を嘗めて歌を詠んだ。	春野町教育委員会『温故知新』春野町郷土研究会報 第50号（春野町、2022年）	
天竜 33	赤石の七人塚	龍山町瀬尻	瀬尻、釜沢の北に、赤石という所がある。戦いに敗れた武田方の残党が、赤石に住みつき暮らした。しかし水の便も悪く住みにくいで、後に下村部落に居を移したと伝えられる。今も赤石には住居跡らしい所があり、七人の武士を祀った「七人塚」という所が残っている。	龍山村教育委員会『ふるさと夜話』龍山村民俗誌1集 龍山の伝説（龍山村教育委員会、1978年）	

天竜 34	信玄塚	春野町宮川	昔、武田信玄がこの付近で休んだので信玄塚と呼んでいる。	森下龍男『周北伝説集』(春野町教育委員会、1996年)	
天竜 35	井戸櫓(二侯城)	二侯町二侯	徳川方が守る二侯城は水の便が悪く、井戸櫓を作り天竜川の水を釣瓶で汲んで飲み水にしていた。それを知った信玄は、たくさんの筏を流し、井戸櫓にぶつけて壊した。飲み水がなくなり、籠城することができなくなった二侯城代の中根照正は、信玄に和睦を申し出て開城し、城兵全てが浜松城へ引き上げて行った。	上阿多古草ふえ会『ふるさとのがたり天竜』(上阿多古草ふえ会、1987年)	
天竜 36	水巻城	佐久間町中部	徳川軍は武田方の水巻城に攻め寄せた。しかし、朝の霧が深く城が見えないので仕方なく引き揚げることとなった。水巻城の兵士達は、竹の皮をまき散らせば足をすべらせるはずだと、船三杯分の竹の皮を城の周りにまき散らした。しかし、徳川軍は竹の皮に火を放ち、またたく間に水巻城の囲りは火の海に包まれ落城した。	佐久間町教育委員会『さくま昔ばなし』(佐久間町教育委員会、1982年)	上阿多古草ふえ会『ふるさとのがたり天竜』(上阿多古草ふえ会、1987年)
天竜 37	武田の鎬矢	龍山町大嶺	龍山のあたりは武田家の領内であった。 長篠の戦いでは、武田軍の軍用路として、白倉沿いの鳳来街道が使われた。この時勝利を祈願して、武田の鎬矢「二重すかし鏃」が奉納されたと伝わる。	渥美登良男『龍山の今昔』(龍山村教育委員会、1970年)	
天竜 38	相明の武田性	上野	三方ヶ原の戦いで徳川軍に追われ山中に逃げ込んだ武田方の侍達がいた。彼らは武田軍の後を追うことはせず、そのまま阿多古の相明に住み着いて百姓の暮らしを始めた。やがて、彼らは「武田」と名乗るようになったと伝えられる。	上阿多古草ふえ会『ふるさとのがたり天竜』(上阿多古草ふえ会、1987年)	
天竜 39	千人塚(春野町)	春野町堀之内	天野氏が守る犬居城が徳川家康に攻められ落城した時、多くの戦死者が出た。千人塚にはその時に亡くなった者達が埋葬されていると伝えられている。	森下龍男『周北伝説集』(春野町教育委員会、1996年)	
天竜 40	内山・片桐の名字	大谷	佐久城の内山氏は信玄と戦い敗れ、その内の七人が大谷へ移り住み、自分たちの名字を「内山」とした。 山東大谷の片桐の名字は、信州にあった片桐城が武田に滅ぼされた後、遠州に逃げ込んだ者たちが「片桐」の名字を名乗るようになったことに由来すると伝わる。	上阿多古草ふえ会『ふるさとのがたり天竜』(上阿多古草ふえ会、1987年)	
天竜 41	岡崎三郎信康	二侯町二侯	信康を殺せとの信長の命を受け、家康は表情を失った。しかし、信長に逆らうことができない家康は、涙ながらに従うこととした。信康は岡崎から遠江に入り、堀江城にしばらく留まった後、二侯城に移った。必死に逃亡を勧める者もいたが、すでに覚悟を決めていた信康はそれらを退けた。信康はわが身の潔白を言い残し、潔く自刃した。	上阿多古草ふえ会『ふるさとのがたり天竜』(上阿多古草ふえ会、1987年)	